# 一木百観音像と木食白道



## １．一木百観音像

**（昭和 49 年 8 月 30 日市指定）**

木造、像高 228ｃｍ。

天明元年（1781）８月に、小田原上条より制作を依頼されて造像した観音立像で、光背には背面に至るまでくまなく菩薩像を彫りこんでいます。サクラ材と伝える一木造りの子安観音像です。

## ２．作者・木食白道

白道は、宝暦５年（1755）に現在の塩山上萩原上原に生まれました。同 11 年（1761）７歳で父親とともに回国の旅にでますが、翌年伊予の宇和島（愛媛県宇和島市）で父親が病死、14 歳まで農業などをして暮らします。その後、出家して戒行すれば名をなすという神託をうけ、四国霊場廻りで回国を再開しました。

17 歳で四国をあとにし、23 歳になるまでの６年間で九州から本州をくまなく巡り、その間の安永２年（1773）には伊豆で師となる木喰行道に出会い、そして安永７年（1778）、24 歳のとき、行道とともに北海道に至ります。

## ３．蝦夷の地で

「木食」とは、木食戒という五穀と塩を絶ち、火を使った調理をせず、草の根や木の実などを主な食料として修行を行う僧侶のことです。白道が木食戒に入ったのは、行道の影響があったと思われますが、自伝『木食白導一代記』によれば、北海道の大田山（せたな町）で念仏を唱えていたときの霊験によるもので、さらに仏像の彫刻もこの地で始まりました。北海道二海郡八雲町の門昌庵には、背面に「南無阿弥陀仏　白道」と墨書された子安観音菩薩像が安置されています。

２年間を北海道で過ごし、青森・秋田・山形・福島・栃木・群馬・長野を経て、天明元年（1781）・27 歳のときに郷里に帰ってきます。

## ４．郷里での白道

郷里の法幢院（甲州市塩山上萩原）で病気を治すまじないを行ったり、人々の求めに応じて仏像を彫ったりしていましたが、これが評判を呼び境内には 1000 人が集まったといい、付近には茶見世、水菓子売り、餅、そば、そうめんなどの出店が立ち並び、境内で舞伎興行までが催されるほど大変な賑わいだったと、市内の旧家に残る日記「萩原木食繁昌」は伝えています。この年の８月、「上じやうより百躰之観

世音建立之願有之」の記述があり、これが上条の一木百観音像と思われます。

ほかにも上原子安地蔵像、福蔵院百体仏、赤尾子安地蔵像など、市内に残る大作をこのときに造像したことがわかります。

## 5．観音堂と観音像

観音堂は集落の中心に建ちます。観音堂の前に立ち集落を概観すると、堂を囲むように集落が構成されていることがよくわかります。

観音堂は 18 世紀末ころの建築と推定されます。集会場を兼ねているため、間口四間、奥行き三間半と広く造られており、観音像は堂の右奥に内陣を設け安置されています。

内陣は格子の板戸で仕切られ、上部には虹梁がかかるなど、お堂としての形式をよく残しています。

『木食白導一代記』では、「御丈七尺五寸の観世音、後光に百八體の小観音をきざミ付て浄正寺におさめ、



御丈七尺五寸の観世音を上条村地蔵堂へおさめ」とあります。浄正寺という寺は不明ですが、像の特徴は観音堂に安置される百観音像と一致します。上条村地蔵堂に納めた像は、特徴はわかりませんが像高は浄正寺に納めた像と同じなので、同一かも知れません。また、浄正寺または上条村地蔵堂が、現在の観音堂を指しているものと思われます。



